

2列王記1-3章「エリヤからエリシャへ」

1A 最後の仕事 1

1B 实际的無神論 1-8

2B 火による裁き 9-18

2A 象徴的継承 2

1B 昇天 1-18

1C ギルガルとエリコ 1-5

2C ヨルダン川 6-14

3C エリヤの霊 15-18

2B 「神の救い」 19-25

1C 命の水 19-22

2C 神の権威 23-25

3A 王への預言 3

1B 子との同盟 1-12

2B 渇きにある水 13-20

3B 忌まわしい儀式 21-27

アウトライン

列王記第二1章を開いてください。早速ですが本文に入ります。

1A 最後の仕事 1

1B 实际的無神論 1-8

1:1 アハブの死後、モアブがイスラエルにそむいた。

私たちは、列王記第一をアハブの死を読んで読み終わりました。そして、ユダの王ヨシャパテとアハブの子アハズヤのことが少し書かれていました。列王記第二はアハズヤの治世から始まりません。

イスラエル国は、主がダビデによって、またソロモンによってその繁栄と平和を確立してくださいました。周囲の国々との戦いがありましたが、ダビデの時代に平定しました(2サムエル 8:2)。その時からモアブは、イスラエルのしもべとなり、貢物を納める者となりました。そしてアハブが死んでこの貢物を止めます(詳しいことは、3章に書いてあります)。当時は、いや今もそうでしょうが、新しい王が任じられて間もない時がまだ権力が確立していないので、反逆をしやすいです。アハブは霊的にはとんでもない人物でしたが、政治的には有能でした。モアブを従えていたのですが、彼がいなくなったので反逆を始めます。このように、次第にイスラエル国の周りが不安定になり、

最後はアッシリヤが来ることになります。

1:2 さて、アハズヤはサマリヤにある彼の屋上の部屋の欄干から落ちて病気になった。彼は使者たちを遣わし、「行って、エクロンの神、バアル・ゼブブに、私のこの病気が直るかどうか、伺いを立てなさい。」と命じた。1:3 そのころ、主の使いがティシュベ人エリヤに告げた。「さあ、上って行って、サマリヤの王の使者たちに会い、彼らに言え。『あなたがたがエクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てに行くのは、イスラエルに神がいないためか。1:4 それゆえ、主はこう仰せられる。あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」それで、エリヤは出て行った。

エクロンはペリシテ人の町です。そこにあるバアル・ゼブブに病気の癒しをアハズヤが求めています。それで主の使いがエリヤのところに来ました。この使いはおそらくイエス・キリストご自身でしょう。そして、大事な言葉をエリヤに与えられます。「イスラエルに神がいないためか。」アハズヤは、「イスラエルに神はいない」とは公言しませんでした。けれども、目の前にいる神の預言者を無視して、ペリシテ人の神を求めることは事実上、イスラエルに神はいないと言っているに等しかったのです。

私たちはしばしば、「無神論」という言葉を使います。日本人で無神論者だという人がいますが、その人は無神論について本当に知りません。かつての旧ソ連や、共産国に行けば無神論が何かを知ることができるでしょう。日本人は数多くの神々をあがめています。けれども、信条として無神論を標榜しなくても、実践において無神論でいることは可能です。神がいないかのように生活することは、「神はいない」と言っているに等しいです。「悪者は高慢を顔に表わして、神を尋ね求めない。その思いは「神はいない。」の一言に尽きる。(詩篇 10:4)」

1:5 使者たちがアハズヤのもとに戻って来ると、彼は、「なぜあなたがたは帰って来たのか。」と彼らに尋ねた。1:6 彼らは答えた。「ひとりの人が私たちに会いに上って来て、こう言いました。『あなたがたを遣わした王のところに帰って行き、彼に告げなさい。主はこう仰せられる。あなたが人をやって、エクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てるのは、イスラエルに神がいないためか。それゆえ、あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」1:7 アハズヤは彼らに尋ねた。「あなたがたに会いに上って来て、そんなことをあなたがたに告げた者は、どんな様子をしていたか。」1:8 彼らが、「毛衣を着て、腰に皮帯を締めた人でした。」と答えると、アハズヤは、「それはティシュベ人エリヤだ。」と言った。

アハズヤは、すぐに彼がエリヤだと分かりました。毛衣を着て、腰に皮帯をしていることも知っており、彼が気にしていた、いや憎んでいた存在です。この「毛衣」は、たぶん荒布と同じような素材であったと考えられます。イスラエル人が荒布を身につけるときは、罪を犯したときにそのことを悲しむ時です。つまり、その服装が悔い改めを求める格好をしていました。エリヤの活動は、とことん

まで墮落し、神に背を向けている王や民に、神の義を明らかにして、悔い改めを呼びかけるそれでありました。

似たような活動をした人を、新約時代に見ることができます。バプテスマのヨハネです。実際、彼はエリヤの霊と力でキリストの前ぶれをすると、御使いガブリエルがザカリヤに告げました。彼は、エリヤと同じように、らくだの毛で織った物を着て、腰に皮の帯を締めていました。そして、イスラエル人に対して、「まむしのすえたち。だれが必ず来る御怒りをのがれるように教えたのか。(ルカ 3:7)」と叫んで、イスラエル人たちの罪を真正面から指摘し、悔い改めを呼びかけました。このバプテスマのヨハネは、ヘロデの悪事を指摘したとき、その妻ヘロデヤがヨハネを斬首するように仕向け、殺されましたが、同じように、エリヤはアハズヤの悪事を指摘することによって、アハズヤによって殺されそうになります。

2B 火による裁き 9-18

1:9 そこで、アハズヤは五十人隊長の長を、その部下五十人とともにエリヤのところに遣わした。彼がエリヤのところに上って行くと、そのとき、エリヤは山の頂にすわっていた。彼はエリヤに、「神の人よ。王のお告げです。降りて来てください。」と言った。1:10 エリヤはその五十人隊長の長に答えて言った。「もし、私が神の人であるなら、天から火が下って来て、あなたと、あなたの部下五十人を焼き尽くすだろう。」すると、天から火が下って来て、彼と、その部下五十人を焼き尽くした。

これは明らかに、かつてのカルメル山におけるバアル預言者との対決との関わりがあります。エリヤが山頂にいて、天から火が下るのはバアルの預言者との対決と同じです。そしてエリヤは、自分が神の人であるならば、彼らが行なっているのは神の御言葉の権威に反抗することであるから、神が裁かれるということです。

1:11 王はまた、もうひとりの五十人隊長の長を、その部下五十人とともにエリヤのところに遣わした。彼はエリヤに答えて言った。「神の人よ。王がこう申しております。急いで降りて来てください。」1:12 エリヤは彼らに答えて言った。「もし、私が神の人であるなら、天から火が下って来て、あなたと、あなたの部下五十人を焼き尽くすだろう。」すると、天から神の火が下って来て、彼と、その部下五十人を焼き尽くした。

再び五十人隊長を遣わしています。今度は「急いで降りて来なさい」と、もっと強く脅迫しています。

1:13 王はまた、第三の五十人隊長の長と、その部下五十人を遣わした。この三人目の五十人隊長の長は上って行き、エリヤの前にひざまずき、懇願して言った。「神の人よ。どうか私のいのちと、このあなたのしもべ五十人のいのちをお助けください。1:14 ご承知のように、天から火が下って来て、先のふたりの五十人隊長の長と、彼らの部下五十人ずつとを、焼き尽くしてしまいました。今、私のいのちはお助けください。」

日本語で「三度目の正直」という言葉がありますが、聖書でも結構同じ意味の回数となっています。事柄の確実性を示す数字です。悪魔がイエス様を誘惑したのは三回、ペテロがイエス様を否んだのは三回、同じくイエス様がペテロのご自身への愛を聞かれたのも三回でした。そしてヨッパにおいて、主がペテロに異邦人への伝道を幻によって示されたのも三回です。

1:15 主の使いがエリヤに、「彼といっしょに降りて行け。彼を恐れてはならない。」と言ったので、エリヤは立って、彼といっしょに王のところの下って行き、1:16 王に言った。「主はこう仰せられる。『あなたが使者たちをエクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てにやったのは、イスラエルにみことばを伺う神がいないためか。それゆえ、あなたは、上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」

主の使いがエリヤに、「彼を恐れてはならない」と言われているのは、反対に言うとエリヤは恐れていたということです。エリヤが天から火を降らせる時に、それは信仰によって祈りとともに発している言葉であり、主が語られることを告げるという重責の中で預言していました。心の中では、相手はどう反応するか恐れていたのです。

1:17 王はエリヤが告げた主のことばのとおり死んだ。そしてヨラムが代わって王となった。それはユダの王ヨシャパテの子ヨラムの第二年であった。アハズヤには男の子がなかったからである。1:18 アハズヤの行なったその他の業績、それはイスラエルの王たちの年代記の書にしるされているではないか。

イスラエルの王ヨラムは、アハズヤと同じ父アハブの息子です。アハズヤは子を持つ前に死にました。そして、これでエリヤの預言の働きは終わります。2章にはエリシャへの引き渡しがあります。エリヤが、確かに最後まで主に忠実に仕えていたと言えます。

2A 象徴的継承 2

1B 昇天 1-18

1C ギルガルとエリコ 1-5

2:1 主がエリヤをたつまきに乗せて天に上げられるとき、エリヤはエリシャを連れてギルガルから出て行った。

ついにエリヤがいなくなります。エリヤは死なずに、そのまま天に上げられます。以前、死なないで引き上げられた聖徒が他にもいました。そうです、エノクです。「エノクは神とともに歩んだ。神が彼を取られたので、彼はいなくなった。(創世 5:24)」主との歩みをしていながら、彼はそのまま神に取られました。

このような型によって、私たち教会の信者も死なないで引き上げられる約束があります。「主は、

号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。(1テサロニケ 4:16-17)」ですから、私たちがエリヤが引き上げられるのを読むにあたり、私たち自身も神と共に歩んでいる中で引き上げられるかもしれないのだという期待感と、緊張感を持たなければいけません。

これからエリヤまたエリシャが歩く道筋は、極めて象徴的です。ギルガルに彼らは今いますが、そこはヨシュア率いるイスラエルが、二つに分かれたヨルダン川の渡河後、初めて宿営したところでもあります。

2:2 エリヤはエリシャに、「ここにとどまっていなさい。主が私をベテルに遣わされたから。」と言ったが、エリシャは言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」こうして、彼らはベテルに下って行った。2:3 すると、ベテルの預言者のともがらがエリシャのところに出て来て、彼に言った。「きょう、主があなたの主人をあなたから取り上げられることを知っていますか。」エリシャは、「私も知っているが、黙っててください。」と答えた。

次の行き先は「ベテル」です。ここはかつて、ヤコブが兄エサウから逃げ、リベカの親戚の家に行くために旅を始め、石を枕にして寝たところです。ここでヤコブが、天からのほしごの夢を見て、アブラハムに与えられた約束、子孫を増やして、土地を所有することを確認しました。

ここに、「預言者のともがら」がいました。預言者サムエルの時代からいましたが、預言者を育てる養成の場、預言者学校と言えるような集団です。アハブに対して、アラムの王を生かしていたことを叱責するために出て行った預言者は、預言者のともがらから出てきた者でした。エリヤは、こうした集団を各地に持っていたと考えられます。エリシャはこれらの学校を監督することになります。

2:4 それからエリヤは彼に、「エリシャ。ここにとどまっていなさい。主が私をエリコに遣わされたから。」と言った。しかし、彼は言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」こうして、彼らはエリコに来た。2:5 エリコの預言者のともがらがエリシャに近づいて来て、彼に言った。「きょう、主があなたの主人をあなたから取り上げられることを知っていますか。」エリシャは、「私も知っているが、黙っててください。」と答えた。

次は、エリコです。ここはもちろん、ヨシュアたちがギルガルから、約束の地で初めに攻略した町です。

2C ヨルダン川 6-14

2:6 エリヤは彼に、「ここにとどまっていなさい。主が私をヨルダンへ遣わされたから。」と言った。

しかし、彼は言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたから離れません。」こうして、ふたりは進んで行った。

三度目の正直の三回目の移動ですが、ヨルダン川です。約束の地に入るための記念すべき川に行きます。

2:7 預言者のともがらのうち五十人が行って、遠く離れて立っていた。ふたりがヨルダン川のほとりに立ったとき、2:8 エリヤは自分の外套を取り、それを丸めて水を打った。すると、水は両側に分かれた。それでふたりはかわいた土の上を渡った。

かつてヨシュアらが堰き止められた川を渡ったのと同じように、ヨルダン川を両側に分けて、かわいた土の上を歩きました。このようにして、エリヤまたエリシャの預言活動は、まさにヨシュアの時代の神の働き、神が生きておられることを証しするためでありました。

2:9 渡り終わると、エリヤはエリシャに言った。「私はあなたのために何をしようか。私があなたのところから取り去られる前に、求めなさい。」すると、エリシャは、「では、あなたの霊の、二つの分け前が私のものになりますように。」と言った。2:10 エリヤは言った。「あなたはむずかしい注文をする。しかし、もし、私があなたのところから取り去られるとき、あなたが私を見ることができれば、そのことがあなたにかなえられよう。できないなら、そうはならない。」

エリシャが願っていたものは、これでした。「あなたの霊の、二つの分け前」です。この表現は、長男が父から相続を受けるための、長子の権利を意味しています(申命 21:17)。エリヤに働いておられる神の霊の働きを自分が受け継ぐようになりたい、なぜなら、この神の働きは今のイスラエルに必要だからだ、と彼は心から願っていました。私たちがここまで、御霊の働きに飢え渴いているのでしょうか？もし、聖書に書かれてある御霊の力と今の自分にある力が異なっていれば、エリシャのように何とかしてそれを受け取りたいと強く願わなければいけません。

2:11 こうして、彼らがなお進みながら話していると、なんと、一台の火の戦車と火の馬とが現われ、このふたりの間を分け隔て、エリヤは、たつまきに乗って天へ上って行った。2:12 エリシャはこれを見て、「わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち。」と叫んでいたが、彼はもう見えなかった。そこで、彼は自分の着物をつかみ、それを二つに引き裂いた。

エリヤの終わりは、実にエリヤらしい終わりでした。火の戦車と火の馬です。エリヤには「火」がいつも付いて回りました。この墮落したイスラエルを立ち返らせるため、焼き尽くす火として神が現れてくださったのです。もし悔い改めなければ裁きの火の中で燃やし尽くされます。けれども、悔い改めれば神の憐れみを受けます。

そして、火の戦車と火の馬とあるように、イスラエルは物理的な戦車と馬ではなく、天の軍勢が必要でした。霊的な力、天における使いたちが必要でした。それでエリシャは、今まだイスラエルに霊の戦いにおける力が必要なを知っていて、それでもエリヤが天に上ったのを見て、「イスラエルの戦車と騎兵たち。」と叫んだのです。そして彼は、「わが父。わが父。」と叫んでいます。エリヤにとってエリシャは信仰の息子であり、エリシャにとってはエリヤは信仰の父でした。そしてエリシャは、泣き悲しんでいます。着物を二つに引き裂いています。これから、神の御霊の働きはどうするのか？と泣き悲しんでいるのです。けれども、すぐにエリヤの霊はエリシャにとどまることになります。

2:13 それから、彼はエリヤの身から落ちた外套を拾い上げ、引き返してヨルダン川の岸边に立った。2:14 彼はエリヤの身から落ちた外套を取って水を打ち、「エリヤの神、主は、どこにおられるのですか。」と言い、彼が再び水を打つと、水が両側に分かれたので、エリシャは渡った。

エリヤの神は今、エリシャと共におられました。ヨルダン川を同じようにして、川を分けて渡りました。このようにして、エリヤの神は確かにエリシャの神となりました。

3C エリヤの霊 15-18

2:15 エリコの預言者のともがらは、遠くから彼を見て、「エリヤの霊がエリシャの上にとどまっている。」と言い、彼を迎えに行つて、地に伏して彼に礼をした。2:16 彼らはエリシャに言った。「しもべたちのところに五十人の力ある者がいます。どうか彼らをあなたのご主人を捜しに行かせてください。主の霊が彼を運んで、どこかの山か谷に彼を投げられたのかもしれない。」するとエリシャは、「人をやってはいけません。」と言った。2:17 しかし、彼らがしつこく彼に願ったので、ついにエリシャは、「やりなさい。」と言った。それで、彼らは五十人を遣わした。彼らは、三日間、捜したが、彼を見つけることはできなかった。2:18 彼らはエリシャがエリコにとどまっているところへ帰つて来た。エリシャは彼らに言った。「行かないようにと、あなたがたに言ったではありませんか。」

五十人のともがらは、エリヤが天に上げられたところは見えていませんでした。それで捜しに行きました。そして彼らは、エリシャにエリヤの霊が留まっているのを見ました。それゆえ、彼らは地に伏して彼に礼をしています。私たちが権威に従うとき、それは人を支配して従わせるものではありません。霊的な権威は、御霊に導かれている者に付帯して与えられるものです。

2B 「神の救い」 19-25

そしてこれから、エリヤからエリシャの預言の働きに入っていきます。ここから驚くべき奇蹟の数々を見ていきます。確かにエリヤの霊の二つの分け前をエリシャは受けました。そして、エリヤよりもさらに多くの業を行ないました。さらに、その奇蹟とするしは、エリヤのような火によって焼き尽くすのではなく、水や命をもたらすものでした。そしてエリシャの名前の意味は「神は救い」です。

ここから私たちは、エリヤが単純に当時生きていた一預言者だけではなかったことを知る必要があります。彼はメシヤが来られる前触れとして、その火の裁きの前に人々を建て直すために現れる預言者なのです。「見よ。わたしは、主の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ。(マラキ 4:5-6)」

けれども、エリヤの次に来るエリシャは「救い」として来ます。ちょうどそれは、バプテスマのヨハネがエリヤの霊と力によって来て、悔い改めのバプテスマを授けて、その延長でイエスご自身が、御国の福音を悔い改めへの呼びかけと共に宣教を行なわれました。それはヨハネと異なり、恵みとまことに満ちているものでした。火を天から降らせるのではなく、命と癒しを与えました。これからのエリシャの働きも、イエス様を指し示しているものが多くなります。

ところでエリヤについてですが、モーセと共に高い山で、イエス様が栄光の姿に変貌した時に現われます。そして弟子たちが質問しますが、こう答えられました。「エリヤが来て、すべてのことを立て直すのです。しかし、わたしは言います。エリヤはもうすでに来たのです。ところが彼らはエリヤを認めようとせず、彼に対して好き勝手なことをしたのです。人の子もまた、彼らから同じように苦しめられようとしています。(マタイ 17:11-12)」バプテスマのヨハネは、エリヤの霊と力で来ました。この彼を律法学者やパリサイ人は受け入れなかった。そのためにヨハネが宣言したメシヤなるイエスをも受け入れない、と言っています。

けれども、エリヤ本人は来て、すべてのことを立て直します。おそらく、黙示録 11 章に出てくるふたりの証人の一人がエリヤなのだろうと思われれます。「『…それから、わたしがわたしのふたりの証人に許すと、彼らは荒布を着て千二百六十日の間預言する。』彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。彼らに害を加えようとする者があれば、火が彼らの口から出て、敵を滅ぼし尽くす。彼らに害を加えようとする者があれば、必ずこのように殺される。この人たちは、預言をしている期間は雨が降らないように天を閉じる力を持っており、また、水を血に変え、そのうえ、思うままに、何度でも、あらゆる災害をもって地を打つ力を持っている。(黙示 12:3-6)」これは患難時代の七年間の前半部分で起こる出来事です。この二人は反キリストによって殺されますが、三日後によみがえり、天に引き上げられます。これを見た者の七千人が神をあがめるようになります。確かに、神の激しい怒りが下る前に立ち返るイスラエル人が起こされるのです。

1C 命の水 19-22

2:19 この町の人々がエリシャに言った。「あなたさまもご覧のとおり、この町は住むのには良いのですが、水が悪く、この土地は流産が多いのです。」2:20 すると、エリシャは言った。「新しい皿に塩を盛って、私のところに持って来なさい。」人々は彼のところにそれを持って来た。2:21 エリシャは水の源のところに行って、塩をそこに投げ込んで言った。「主はこう仰せられる。『わたしはこの

水をいやした。ここからは、もう、死も流産も起こらない。』2:22 こうして、水は良くなり、今日に至っている。エリシャが言ったことばのとおりである。

ヨルダン川からエリコは、さほど遠くありません。そして死海からも遠くありません。そのために塩分があったのでしょうか、水が飲めるようなものではありませんでした。この水を飲んで、流産になるほどが多かったのです。そして「塩」ですが、穀物の捧げ物に添える「神の契約の塩(レビ2:13)」というものがあります。そして、水が良くなりました。今日に至っているとありますが、実際に今も、エリコの町に泉があり、そこから飲料として用いることのできる水が流れています。

かつては神の命令によって聖絶した町ですが、今は癒しと命を与えています。エリシャの働きの特徴がすでに始まっています。

2C 神の権威 23-25

2:23 エリシャはそこからベテルへ上って行った。彼が道を上って行くと、この町から小さい子どもたちが出て来て、彼をからかって、「上って来い、はげ頭。上って来い、はげ頭。」と言ったので、2:24 彼は振り向いて、彼らをにらみ、主の名によって彼らをのろった。すると、森の中から二頭の雌熊が出て来て、彼らのうち、四十二人の子どもをかき裂いた。2:25 こうして彼は、そこからカルメル山に行き、そこからさらに、サマリヤへ帰った。

エリヤといっしょに来た道に戻っています。エリコからベテルに行きました。そこに、「小さな子ども」とありますが、なぜこのような訳をしたのか分かりません。この文章だと、小学生ぐらいの小さな子が悪ふざけをしてエリシャが腹を立てて呪ったら、雌熊が出てきて食べちゃった、という話になってしまいます。けれども、このヘブル語は、ヨセフが39歳の時に「若者」という訳となっている言葉と同じです(創世 41:12)。アブシャロムが成人になっている時にも使われています(2サムエル 14:21)。したがって、「若者」と訳してもよい言葉です。したがって、かなり成熟した成人であると考えられます。そして「はげ頭」というからかいですが、レビ記において、はげは清いとされています(13:41)。したがって、それをからかう根拠にしているのは、ひどい侮辱です。

そしてエリシャは主の名によって呪いました。これら若者は確信的なものがあつたと考えられます。四十二人でもって、神の預言者をからかったのです。したがって、先にエリヤに対して五十一人の部隊がやって来た時に天から火が降ったように、雌熊によってエリヤに与えられた権威は、今はエリシャに与えられているのだということを知らせようとしていると思われます。

そして、カルメル山に行き、サマリヤに行きました。霊的に重要なところは押さえています。そしてイスラエルの首都サマリヤに行きます。

3A 王への預言 3

そして三章は、エリシャが確かに国レベルで預言者として認められ、用いられる姿を見ます。

1B 子との同盟 1-12

3:1 ユダの王ヨシャパテの第十八年に、アハブの子ヨラムがサマリヤでイスラエルの王となり、十二年間、王であった。3:2 彼は主の目の前に悪を行なったが、彼の父母ほどではなかった。彼は父が造ったバアルの石の柱を取り除いた。3:3 しかし、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を彼も犯し続け、それをやめようとはしなかった。

アハズヤが死に、ヨラムが王となりました。彼はアハブの罪を犯しませんでした。相変わらずヤロブアムの罪、つまり金の子牛を拝むという過ちを行なっていました。

3:4 モアブの王メシャは羊を飼っており、子羊十万頭と、雄羊十万頭分の羊毛とをイスラエルの王にみつぎものとして納めていた。3:5 しかし、アハブが死ぬと、モアブの王はイスラエルの王にそむいた。

先に話した、モアブの反逆です。このようにして羊を納めていましたが、やめてしまいました。興味深いことに、イザヤ書の中でモアブの国に、再び貢を持って来なさいという命令がモアブに対してかけられています。「子羊を、この国の支配者に送れ。セラから荒野を経てシオンの娘の山に。(16:1)」貢を納めることによって、シオンにおられる主に従いなさい、それでアッシリヤから救われるというメッセージでした。

3:6 そこで、ヨラム王は、ただちにサマリヤを出発し、すべてのイスラエル人を動員した。3:7 そして、ユダの王ヨシャパテに使いをやって言った。「モアブの王が私にそむきました。私といっしょにモアブに戦いに行ってくれませんか。」ユダの王は言った。「行きましょう。私とあなたとは同じようなもの、私の民とあなたの民、私の馬とあなたの馬も同じようなものです。」3:8 そして言った。「私たちはどの道を上って行きましょうか。」するとヨラムは、「エドムの荒野の道を。」と答えた。

再びヨシャパテが同じ過ちを犯しています。アハブの時も、アハズヤの時も、そして今、ヨラムの時も、彼は同盟を結んでしまっていました。そして、エドムへの荒野の道と言っていますが、地理的には死海の南部にあるエドムの荒野の道からモアブを攻め取ろうとしました。

3:9 こうして、イスラエルの王は、ユダの王とエドムの王といっしょに出かけたが、七日間も回り道をしたので、陣営の者と、あとについて来る家畜のための水がなくなった。3:10 それで、イスラエルの王は、「ああ、主が、この三人の王を召されたのは、モアブの手に渡すためだったのだ。」と言った。

思ったより道程が長くかかったようです。携えていた水が枯渇して、ヨラムはこのようにしたのは主ご自身だとつぶやいています。

3:11 ヨシャパテは言った。「ここには主のみこころを求めることのできる主の預言者はいないのですか。」すると、イスラエルの王の家来のひとりが答えて言った。「ここには、シャファテの子エリシャがいます。エリヤの手に水を注いだ者です。」3:12 ヨシャパテが、「主のことばは彼とともにある。」と言ったので、イスラエルの王と、ヨシャパテと、エドムの王とは彼のところに下って行った。

ヨシャパテは、ヨラムの気落ちした言葉を聞いて、決してそうではないと見抜いていました。そしてかつてアハブに対するのと同じように、主の御心を求めることのできる預言者はいないのかどうか尋ねています。

エリシャは、エリヤの水を注いでいた、とあります。つまり、エリヤに給仕していたということです。その話を聞いて、ヨシャパテは主のことばがエリシャと共にあると断言しています。指導者になるための前準備が必要です。このように仕える必要があります。これをヨシャパテは預言者の資格だと考えました。

ところでエドムも参戦しています。イスラエルやユダと戦ってもいいはずですが、この時にはモアブがエドムにとって不安定要因になっていたものと思われます。

2B 渇きにある水 13-20

3:13 エリシャはイスラエルの王に言った。「私とあなたとの間に何のかかわりがありますか。あなたの父上の預言者たちと、あなたの母上の預言者たちのところにおいでください。」すると、イスラエルの王は彼に言った。「いや、主がこの三人の王を召されたのは、モアブの手に渡すためだから。」3:14 エリシャは言った。「私が仕えている万軍の主は生きておられる。もし私がユダの王ヨシャパテのためにするのでなかったなら、私は決してあなたに目も留めず、あなたに会うこともしなかったでしょう。」

エリシャはヨラムに、父アハブの預言者、母イゼベルの預言者を呼べばよいではないか、と言っています。けれども、ヨラムは不信仰であります。バアル神ではなく、ヤハウエに対する期待を持っていました。そこでエリシャは預言を行なおうと思いました。そして何よりも、ヨシャパテがいるからだ、と言っています。もしヨシャパテがいなければ、ヨラムは滅ぼされていたことでしょう。ヤロブアムの罪を犯していたのですから。けれども、主は願いを聞いてくださいました。

3:15 しかし、今、立琴をひく者をここに連れて来てください。」立琴をひく者が立琴をひき鳴らすと、主の手がエリシャの上に下り、3:16 彼は次のように言った。「主はこう仰せられる。『この谷にみぞを掘れ。みぞを掘れ。』3:17 主がこう仰せられるからだ。『風も見ず、大雨も見ないのに、この谷

には水があふれる。あなたがたも、あなたがたの家畜も、獣もこれを飲む。』

音楽と預言、これは大切な要素かもしれません。私たちは、5月初頭の日本カルバリーチャペルのカンファレンスで、賛美と音楽を奏でながら、神の御霊の働きを待ち望む、アフターグローに参加しました。音楽の役目は教会ではとても大きいです。「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住ませ、知恵を尽くして互いに教え、互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。(コロサイ 3:16)」

彼らはおそらく、エドムとモアブの境にある、ゼレデ川のところにいるものと思われます。死海の南端のところで川の水が入ります。そこは沙漠になっていますから、涸れ川になって何もありませんでした。そこに溝を掘れとエリシャは言います。そこに水の奇跡を神が行なわれます。

3:18 これは主の目には小さなことだ。主はモアブをあなたがたの手に渡される。3:19 あなたがたは、城壁のある町々、りっぱな町々をことごとく打ち破り、すべての良い木を切り倒し、すべての水の源をふさぎ、すべての良い畑を石ころでだいなしにしよう。」3:20 朝になって、ささげ物をささげるところ、なんと、水がエドムのほうから流れて来て、この地は水で満たされた。

水を与えられるだけでなく、その川を用いて大勝利を神が与えられます。「すべての良い木を切り倒し、すべての水の源をふさぎ、すべての良い畑を石ころでだいなしにしよう。」という言い回しは、徹底的な侵略をしたことの表れです。

3B 忌まわしい儀式 21-27

3:21 モアブはみな、王たちが彼らを攻めに上って来たことを聞いた。よろいを着ることのできるほどの者は全部、呼び集められ、国境の守備についた。3:22 彼らが翌朝早く起きてみると、太陽が水の面を照らしていた。モアブは向こう側の水が血のように赤いを見て、3:23 言った。「これは血だ。きっと王たちが切り合って、同士打ちをしたに違いない。さあ今、モアブよ、分捕りに行こう。」3:24 彼らがイスラエルの陣営に攻め入ると、イスラエルは立ってモアブを打った。モアブはイスラエルの前から逃げた。それで、イスラエルは攻め入って、モアブを打った。

なんと主は、水を与えられただけでなく、この朝日の光線の反射を用いられて勝利へと導かれたのです。

3:25 さらに、彼らは町々を破壊し、すべての良い畑にひとりずつ石を投げ捨てて石だらけにし、すべての水の源をふさぎ、すべての良い木を切り倒した。ただキル・ハレセテにある石だけが残ったが、そこも、石を投げる者たちが取り囲み、これを打ち破った。

キル・ハレセテとは、モアブの首都で、通常は「キル」と呼ばれているところです。

3:26 モアブの王は、戦いが自分に不利になっていくのを見て、剣を使う者七百人を引き連れ、エドムの王のところへ突入ろうとしたが、果たさなかった。3:27 そこで、彼は自分に代わって王となる長男をとり、その子を城壁の上で全焼のいけにえとしてささげた。このため、イスラエル人に対する大きな怒りが起こった。それでイスラエル人は、そこから引き揚げて、自分の国へ帰って行った。

なんと、町の侵略を、息子のいけにえによって防ぐことができました。恐ろしいことですが、モアブの王メシャは、このように負け戦になったのは、自分たちの神ケモシュが怒ったからだと思ったからです。そして、幼子のいけにえは盛んに行っていました。ですから、これはメシャにとっては当たり前の行為でした。けれども、イスラエルにとってはあまりにも忌まわしいことでした。それでキル・ハセレテにイスラエルは攻め入ることはありませんでした。

ところでこの3章は、聖書以外の文献によって確かにこの歴史があったことを知っています。「メシャ碑文」と言っても、メシャ王自身が書いたものです。もちろん不利なことは書いておらず、自分の功績だけを書き残しています。これが当時、いや今もそうですが、不利なことは書きませんね。けれども聖書はユニークです。人間の失敗の様々を学んでいます。

こうしてエリシャの預言者としての働きは、御霊に満たされるだけでなく、国の指導者に対して預言の言葉を話すことができる力を持っていました。こうしてエリシャがエリヤの受け継ぎを完全に済ませたことが分かります。私たちは、神の御霊の働きに忠実に従っているでしょうか？それは、独りで声を聞いたということもありますが、多くの場合は、神の霊がある人に働いて、その人を通して神の御霊の導きを求めました。

